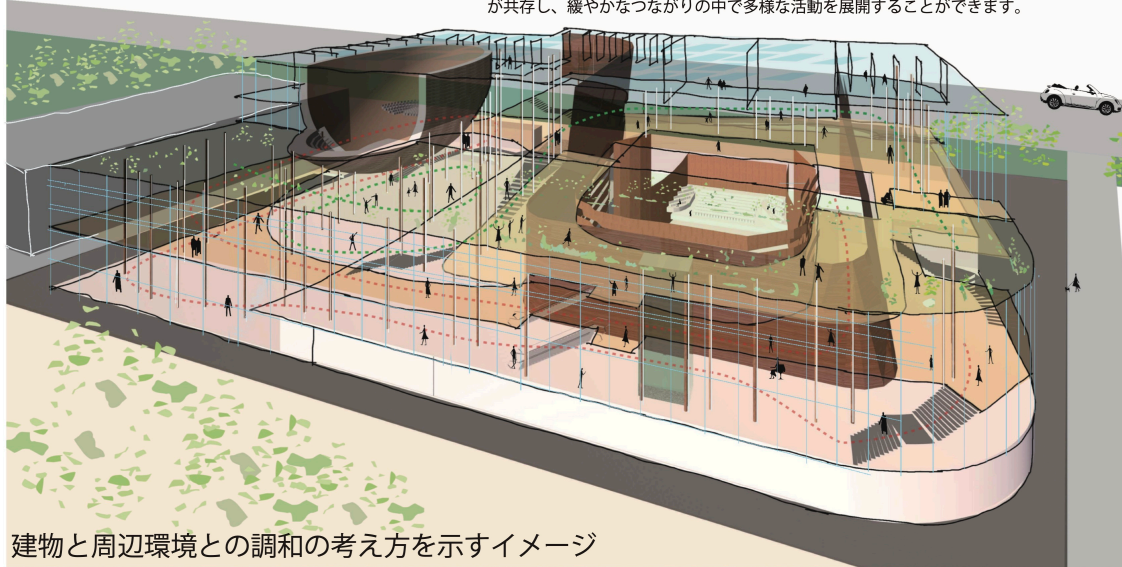
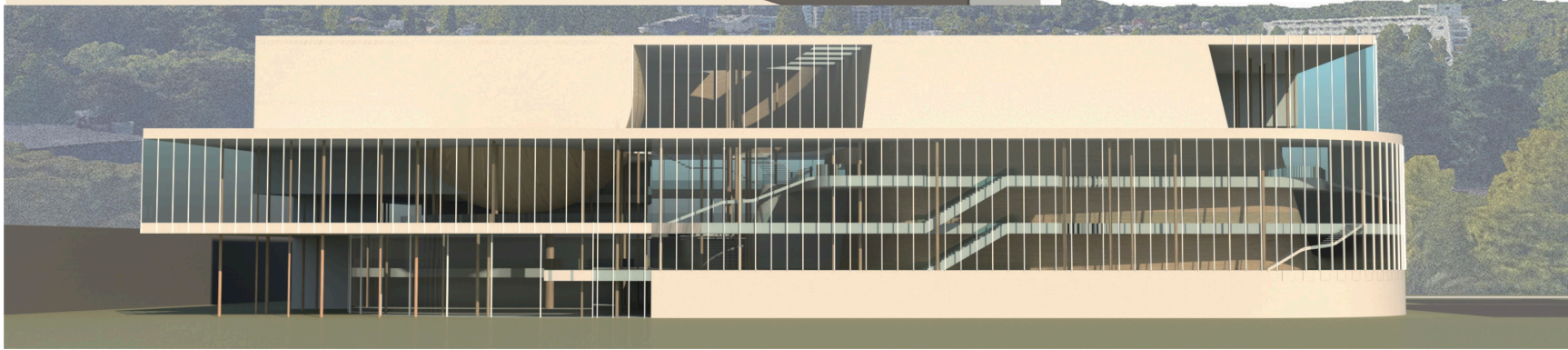


ドリフティングコラム

洞穴空間を漂うような木の列柱が建築全体を緩やかにつなぎます。木の列柱があることにより、瞑想するように思いをはせるような静の活動とアクティブな活動が共存し、緩やかにつながりの中で多様な活動を展開することができます。



建物と周辺環境との調和の考え方を示すイメージ



誰でも散策できる開かれた市民の拠点

建築全体を通り抜ける洞穴空間は、誰でも立ち入ることのできるオープンな空間であり、散策路のように誰でも気軽に回遊することができます。メインエントランスとなる交流イベントロビーにアクセスして、ドリフティングコラムに導かれるように洞穴空間を散策して行くと、芸術文化や災害文化の様々な活動や出会いに偶発的に触れながら、周囲の緑地や広瀬川、仙台の街といった周辺環境への豊かな眺望が得ることができます。誰でもアクセスできる回遊性のある空間構成とすることで、市民が様々な文化に興味を持つきっかけをつくります。芸術文化と災害文化の拠点を利用する目的がなくとも、誰でも気軽に立ち寄りたくなるような施設づくりをすることで、芸術文化と災害文化に興味を持った市民の手で新たな拠点を育ててゆくような流れが緩やかに生まれ、やがては仙台市の文化を発展させる大きな流れになるでしょう。

洞穴空間

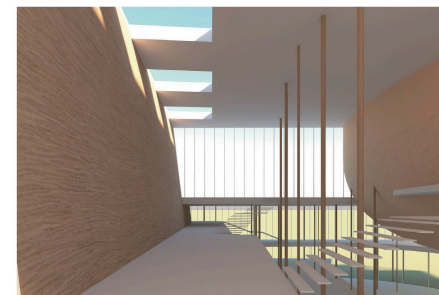
洞穴のような空間は、誰でも立ち入ることのできるオープンな場です。洞穴空間には、施設全体のロビー空間の他、災害文化エリアの機能やホールのホワイエがあります。災害文化エリアは洞穴空間のなかに漂うように、各所機能を配することで、ホール利用者や他の利用目的の方も、自然に災害文化に触れられる拠点づくりを目指します。日常生活の中で意識せずとも、自然に災害文化にふれるようにすることが、過去の災害の思いを馳せ、防災について日常で意識して生活することにつながるでしょう。ホールでイベントが無いときは、ホールのホワイエ部分も開放することで、洞穴空間ををより流動的に利用することができます。



中心部震災メモリアル拠点のイメージ



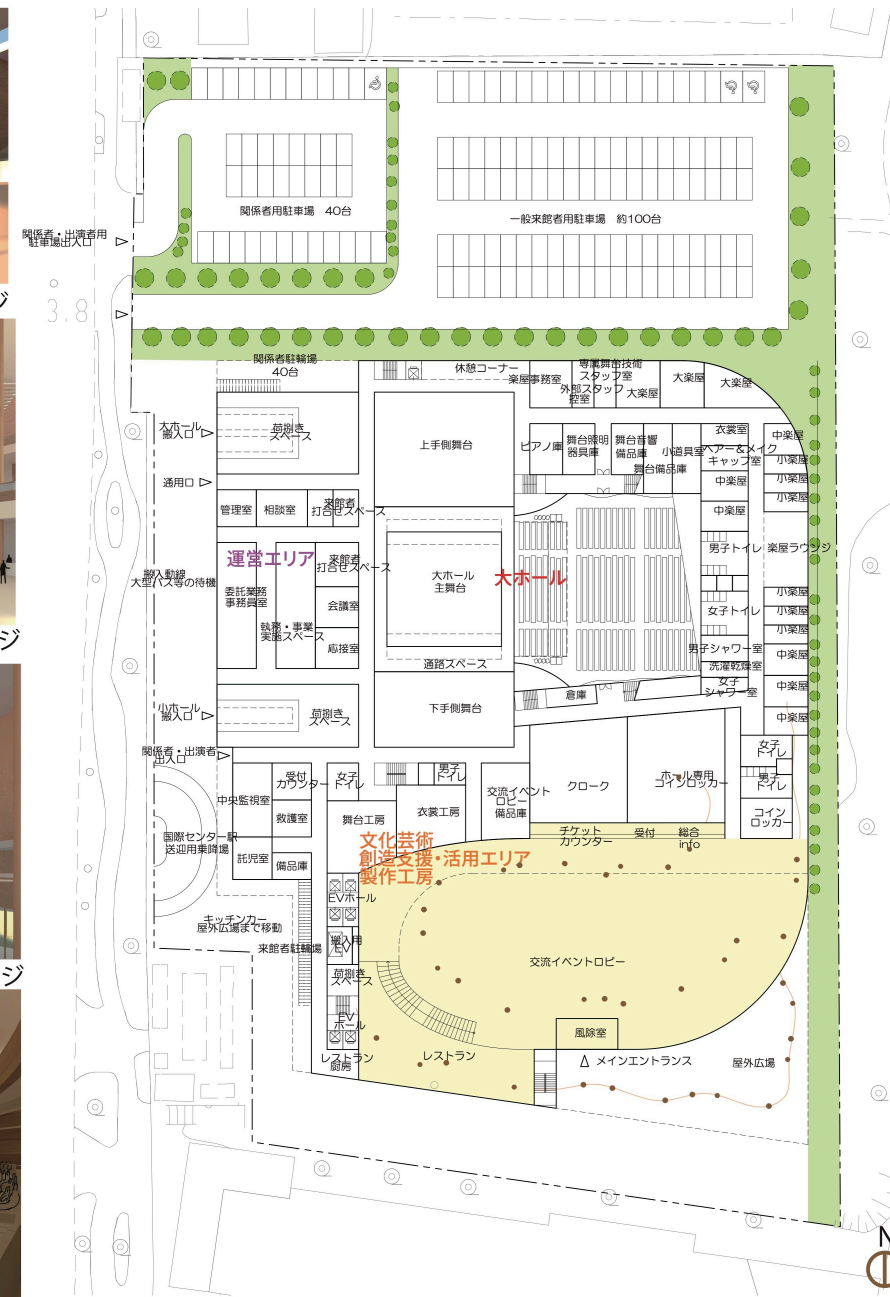
交流イベントロビーのイメージ



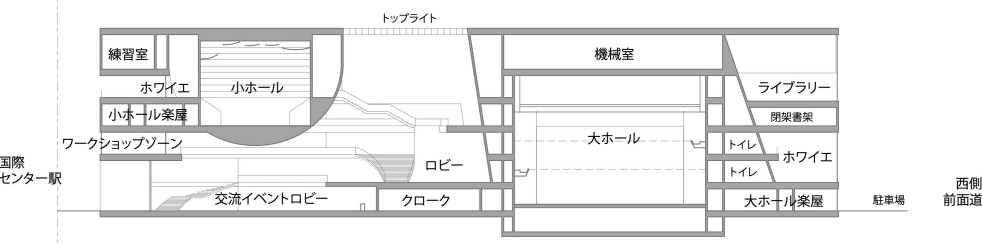
クワイエットスペースのイメージ



大ホール内部空間のイメージ



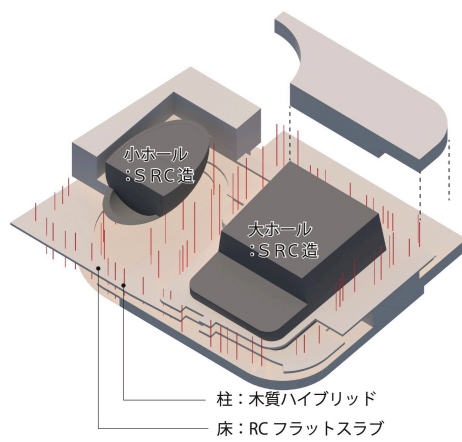
配置兼1階平面イメージ図 S=1/600



南北断面イメージ図 S=1/600



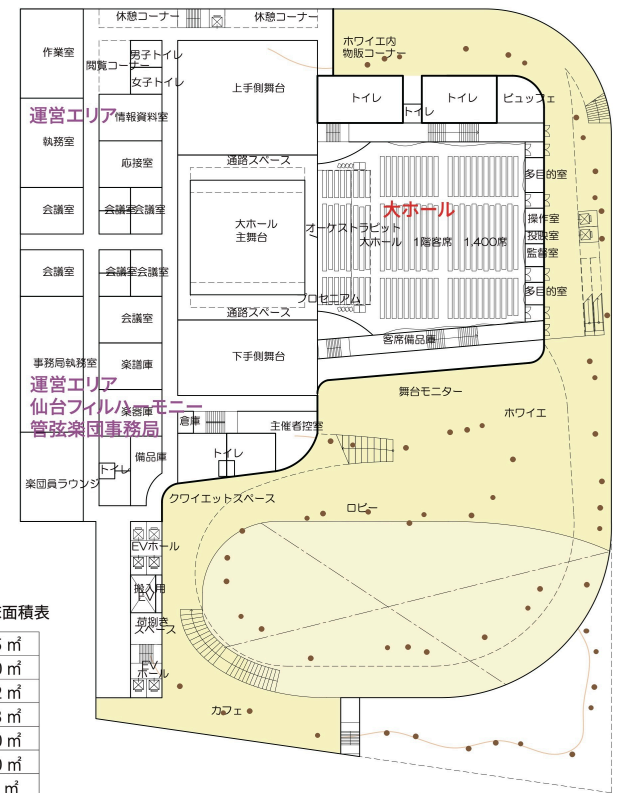
東西断面イメージ図 S=1/600



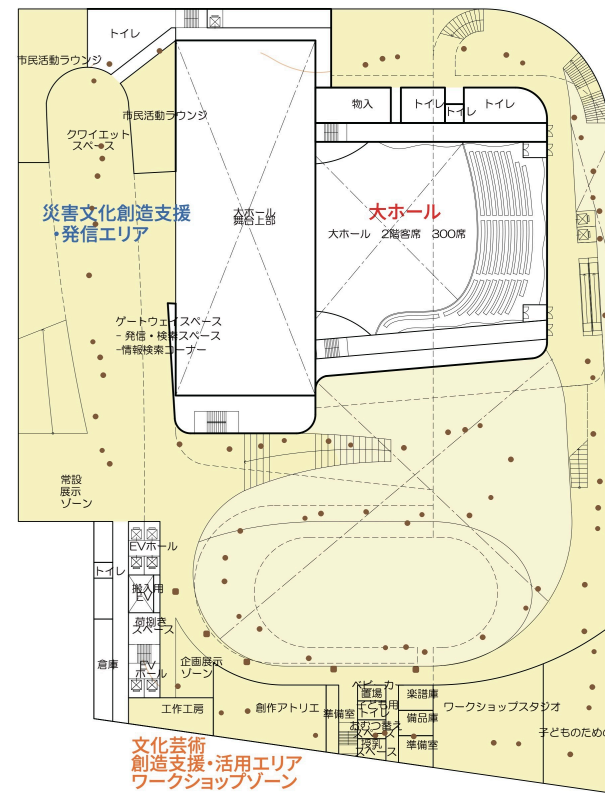
構造計画
大ホールと小ホールは音響を考慮して剛強なSRC造とし、それらをつなぐ床は木質ハイブリッドの柱で支持されたRCフラットスラブとします。地震に対しては免震構造を採用します。小ホールの地震力はフラットスラブを介して大ホールで支持しますが、免震構造とすることにより小ホールの偏った配置が可能となります。また免震構造は地下鉄東西線の防振対策にも有効です。木質ハイブリッドの柱は内蔵された鉄骨部材が鉛直力を負担し、外周の木部材が耐火性能と座屈補剛性能を負担します。

各階別の延床面積表

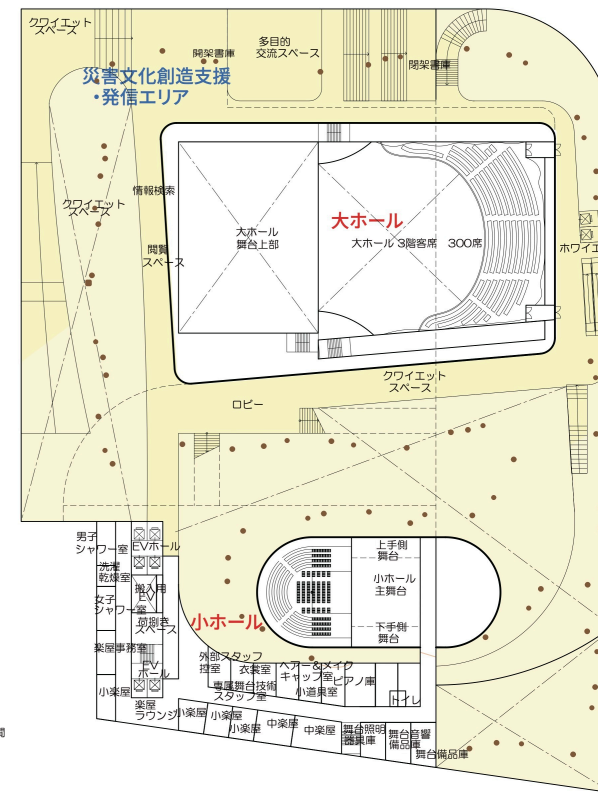
6F	2,175 m ²
5F	2,640 m ²
4F	4,562 m ²
3F	5,603 m ²
2F	6,630 m ²
1F	8,890 m ²
B1F	1,500 m ²
合計	32,000 m ²



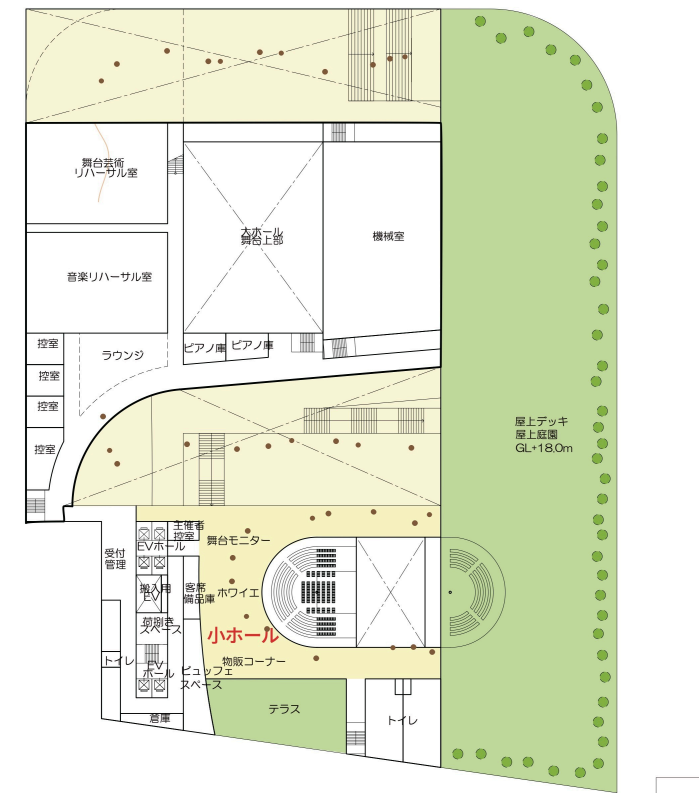
2階平面イメージ図 S=1/600



3階平面イメージ図 S=1/600



4階平面イメージ図 S=1/600



5階平面イメージ図 S=1/600